日本語
発音アクセント辞典

日　本　語

発音アクセント辞典

日本放送協会編

日本語　発音アクセント辞典　　定価　2,800円

昭和41年8月10日　第1刷発行
昭和59年2月10日　第38刷発行

検印
廃止

編集人　日本放送協会
東京都渋谷区神南2-2-1

発行人　藤根井　和夫

印刷　凸版印刷
製本　豊文社

発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41－1
郵便番号150振替東京1-49701

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

序

「話しことば」が，日本で広く国民の間に認識されはじめたのは，日本に放送が始まってからのことである。

以来40年余り，放送は常に「話しことば」とともにあり，日本の「話しことば」の成長発展に尽くしてきたわけであるが，しかし，これも「日本語の歴史」といった面からみればいわゆる「歴史上の一こま」にすぎないであろう。つまり，この40年間は，日本の「書きことばの時代」から「話しことばの時代」への移り変わりに，「放送」がその橋渡しの役をつとめたのにすぎないのであって，むしろ本当の「現代のことばの歴史」――画期的な「話しことばの確立」の時代は，これから始まることであろう。

それに，いまや「電子計算機の利用」によって，「言語の大量統計処理」も出来る新しい時代を迎えたので，近い将来の言語研究の成果には強い関心がもたれるし，またこれに伴う「話しことば」の成長発展にも深い興味がもたれる次第である。しかし，それにしても，ことばは「生きもの」なのであって，その成長なり発展なりの根底には，「生命力」が必要である。　その生命力とは，「国民の認識」である。つまり，全国民がことばに対する認識をもつことが，ことばの成長発展の唯一の前提条件である。

正確な表現力と美しい響きをもったことば。
しゃべりやすく聞き取りやすいことば。
やさしくだれにもわかりやすいことば。

国民のひとりひとりが常にこういった「ことばの理想像」「あるべき姿」について，一つのビジョンを胸深く秘めているならば，日本の話しことばは，あるいはそれだけでも自然に豊かに成長発展してゆくであろうし，高度の言語研究などもむしろそれによって方向づけられてゆくに違いないのである。

ところで，ＮＨＫではこういった考え方のもとに，今度新しく「日本語発音アクセント辞典」を編集発行した。もちろん，この辞典は，ことばと，その発音・アクセントの単なる採集といったものではない。これは，何万何十万とあることばの中から，現在日常の話しことばとして最も多く使われているもの――最も生命力の強いものを選び出し，それに共通語としての条件，つまり，現在の時点における最も洗練され純化された，発音アクセントの表記を付けたものである。

……現在の時点における最も洗練され最も純化された発音アクセント――

これは，同時に，「話しことばのあるべき姿」・「話しことばの理想像」追求の意欲念願にもつながるものであって，決して単なる「現実の事象」「現実問題」としてだけ受け取られるべきではないと思う。

さらに言うならば，ことばについての全国民の認識が，この辞典によって再確認され，やがてそれが国民の，ことばについての理想像追求の意欲ともなるならば，皆さまとともにまことにご同慶にたえないところであって，そこにこそ「生きもの」としての「話しことば」の成長発展も期待できるわけである。

昭和41年3月

日本放送協会会長
前田義徳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ま え が き

発音・アクセントは時世の移り変わりにつれて，絶えず変動しているものである。ＮＨＫでは過去２回（昭和18年と同26年）「日本語アクセント辞典」を編集刊行しており，今回は３回めの編集刊行である。いうまでもなく，前回同様，ことばの変動，特に発音・アクセントの変化に応じて，編集刊行したものであるが，今回の辞典の特色は，各語の「発音」について，特に力を入れたことであって，この点から名称も「日本語発音・アクセント辞典」としたわけである。

新旧辞典の内容のおもな相違点を述べると

語いの数は

旧辞典　47,000語

新辞典　70,000語

旧辞典47,000語のうち

アクセントが変わっているもの　12,000語

新しく加えた語　23,000語

となっており

新辞典の語い数　計　70,000語

となっている。

なお，新辞典の編集にあたっては

① アクセントは，現在の時点で，標準語としての見地から見て最も洗練され純化されたものを選び出した。

またアクセント記号は，できるだけ厳密な表記法を採用した。

② 各語の発音（促音・長音・清音・濁音などの点については，放送用語委員会で慎重に審議決定した。

③ 特に，各語の「無声化」の個所を調査審議し，その記号を付けた。

④ 難解な専門用語には，簡単な解説（あるいは記号）を付けた。

⑤ 共通語の発音，アクセントの理論と法則を巻末に掲げ，図解説明した。

この辞典編集には，特に，平山輝男氏，金田一春彦氏，秋永一枝氏，桜井茂治氏に終始，格段のお力添えをいただいており，そのご好意とお骨折りに，厚くお礼を申し上げる次第である。

なお，以上の各氏からは「日本語のアクセント」について，それぞれ貴重な解説文をいただいているので，これらは巻末に掲載させていただくことにした。

また，「標準アクセント選定」のための参考資料とするため，アクセント調査を数回にわたって行なった。この調査にご協力くださった文京七中，目黒四中，深川三中，宝仙学園，館山二中の生徒・父兄の皆さま方およびＮＨＫ全アナウンサーには厚くお礼を申し上げる。

さらに，編集に際しては，大石初太郎氏，辻村敏樹氏，武部良明氏，およびＮＨＫ内部の関係者にそれぞれの立場からご協力を仰いだ。あわせて厚く感謝の意を表する次第である。

なお，アクセント専門委員会の委員は下記のとおりである。

〔外部〕

平山　輝男氏（東京都立大学教授）
金田一春彦氏（東京外国語大学教授）
秋永　一枝氏（早稲田大学講師）
桜井　茂治氏（国際基督教大学助教授）

〔日本放送協会〕

小林　利光　竹内　三郎　木村　和美
新藤　丈夫　山本　嘉昭　後藤美代子
塚越　恒爾　藤井チズ子　井口虎一郎
家喜富士雄　横井正千代　山賀　長治
菅野　　謙　宮島　栄一

昭和41年３月

日本放送協会
総合放送文化研究所長
熊　谷　幸　博

この辞典の使い方

この辞典には，日常多く使われることば，約70,000語を選び，その標準的な発音・アクセント，および，それらの“書き表し方”を示し，50音順に配列した。

1　発音について

(1)　太字のカタカナは，そのことばの発音を示したもので，したがって現代かなづかいによる表記とは必ずしも一致しない。

例．ガッコー〔がっこう〕，ヒョージュン〔ひょうじゅん〕，カナズカイ〔かなづかい〕，アルイワ〔あるいは〕

(2)　ガ・ギ・グ・ゲ・ゴは，ガ行鼻音〔ŋa・ŋi・ŋu・ŋe・ŋo〕を表す。

(3)　チ・ツの濁音はすべてジ・ズとした。

(4)　長音は“ー”で表した。これらは，その前の母音の繰り返しと認めて，それに相当する順位に配列した。

(5)　ケイケン〔経験〕，セイカク〔正確〕などのエ段音に続くイは，特に改まって一音一音明確に言う場合には，イと発音されるが，日常自然の発音では長音になる。すなわち，

経験 { 改まった場合は　ケイケン
自然な発音では　ケーケン

となる。

これらは，元来，ケイケン，ケーケンと併記すべきであるが，便宜上ケイケンとのみ記載した。

ただし，イの前に，意義の切れ目がある場合には長音とはならない。

例．テイレ〔手入れ〕（＝て＋いれ）

(6)　ウマ〔馬〕，ウメ〔梅〕などのような，マ・メ・モの前のウは，改まった場合には，ウと発音されるが，日常自然の発音では，母音の伴わない〔m〕の音になるのが普通である。しかし，ウモー〔羽毛〕（＝う＋もう）のように，ウの次に意義の切れ目のあるものは，はっきりウモーと

発音する。

(7) シュ，ジュを含むことばの発音表記は，シュクシツ〔祝日〕，アッシュク〔圧縮〕，ハンジュク〔半熟〕，ガイシュツ〔外出〕，ギジュツ〔技術〕などのようにシュ，ジュとしたが，その発音については，シ，ジに近く発音することも認められる。

ただし，固有名詞そのほかで，どうしても直音のままで使わなければならないものは注意して発音し，特に，次のような類音語のあるものについては明確に発音しなければならない。

例．シュッテン〔出典〕 → シッテン〔失点〕

イシュツ〔移出〕 → イシツ〔遺失〕

トーシュ〔党首〕 → トーシ〔闘志〕

(8) て囲んだところは母音の無声化を示した。元来，母音の無声化は，一定の法則のもとに行われるものであるが，発音の明確さを必要とする場合には必ずしもそのとおりにはいかない。つまり有声音になることがある。そこで，この辞典では，次のような場合の母音の無声化はあえて表示しなかった。しかし実際に発音する場合には，母音は無声化する。別項，解説中「共通語の発音で注意すべきことから」第1章「母音の無声化」31ページ参照。

母音の無声化の表示を省いたのは，次の場合である。次の諸例中□を付したものが無声化記号を省いたものである。

a．アクセントの下がりめに来て，ハ行音，サ行音に続く場合。

例．ヒフ〔皮膚〕

クシ〔駅使〕

b．無声化すべきサ行音が，サ行音の前に来たとき

例．シシン〔私信〕　スシ，スシ〔*寿司〕

ススキ〔*薄〕　シサイ〔司祭〕

c．ハ行音，サ行音に続き，しかも意義の切れ目のある場合。

例．キョーアクハンニン〔凶悪犯人〕

ボーエキスイジュン〔貿易水準〕

d．アクセントに関係なく，語末に来た場合。

例．スパイク　spike，スベラカシ　すべらかし

タライマワシ　たらい回し

e．そのほか特殊な場合。

例．コ̄コロ〔心〕　カ̄カル〔掛かる〕　カタ̄ナ〔刀〕

(9) 外来語の発音表記は，だいたい一般の慣用に従い，以下の場合は原音に近い「発音表記」とした。

〔di〕〔dju〕　　のものはディ，デュ
〔fa〕〔fi〕〔fe〕〔fo〕　　〃　ファ，フィ，フェ，フォ
〔ti〕〔tju〕　　〃　ティ，テュ
〔mjəm〕〔njəm〕など　〃　ミューム，ニュームなど

と表記してある。

例．コンディション　〔condition〕
ファン　〔fan〕
パーティー　〔party〕
アルミニューム　〔aluminium〕

ただし，すでに発音が固定している語はそのままの発音表記とした。

例．チップ　〔tip〕
グローブ　〔glove〕
ラジオ　〔radio〕
バイオリン　〔violin〕
ウイスキー　〔whisky〕

(10) かっこ内の発音は二義的なものとして認めたものである。

例．オイバネ，（オヨバネ）追いばね

また，標準音としての順位を決めかねる発音もあり，これらは，それぞれの項に併記した。

例．シュリューダン，テリューダン〔手りゅう弾〕
テリューダン，シュリューダン〔手りゅう弾〕

またかっこの中に，接頭語「お」，接尾語「さま」などを添えた形を入れ，それにアクセント記号を付けたものがある。これは「お」「さま」などを付けるとアクセントが変わる場合である。

例．コ̄ゴト（オ̄ゴト）小言（お～）
カ̄ンノン（カ̄ンノンサマ，カ̄ンノンサマ）観音（～さま）

(11) 一つの語に二つ以上の発音がある場合に，～の記号で省略記載した個所もある。

例．シカクテントー，シカクテントー，シカク・テントー，シカク・テントー，シキャク～も　主客転倒〈×顚〉

これは，シュカクをシュキャクに変えて発音してもよいことを示す。その場合も，発音，アクセントともに変わらない。

2　アクセントについて

(1) 発音表記の上の横線‾‾は，その語のアクセントを示す。すなわち，横線の部分は高く発音され，横線のない部分は低く発音される。また，横線の最後の部分が¯になっている場合は，その次の音が下がる。また，終わりの部分が‾で終わっている語はいわゆる平板型のもので，次に来る助詞も下がらない。

例．ハシ〔橋〕ハを低く，シを高く。(次に来る助詞は低くなる。)
ハリバコ〔針箱〕ハを低く，リバコを高く。(次に来る助詞は，リバコと同じ高さで続く。)

また，この辞典に掲げたアクセントの型は，名詞は原則として単独に発音した場合のアクセント，動詞・形容詞などは終止形のアクセントである。名詞に助詞の付いた場合や，動詞・形容詞などの活用形のアクセント，および，数詞・助数詞のアクセントについては，解説中の「共通語のアクセント」(45ページ)，および「数詞，助数詞の発音とアクセント」(91ページ)を参照されたい。

(2) また，一つの語について，2種類，またはそれ以上のアクセントを示している語は，標準アクセントが2種類またはそれ以上あることを示しているわけであるが，この場合には標準アクセントとして，よりふさわしいと思われるものを先にした。

例．トーカイドー，トーカイドー〔東海道〕

(3) 熟語などの中には中点「・」をつけて載せたものがある。これはアクセントの区切りのある語である。

3　各語の表記について

発音表記以外の部分の表記は「ＮＨＫ用字用語辞典」(第二版)(昭和48

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

年3月発行）の文字づかいに従った。

(1) 二つあるいはそれ以上の発音のある語の表記は，1番目に記した発音に合わせた。

例．ウスキミ，ウスッキミ　薄気味　（～が悪い）
　　ウスッキミ，ウスキミ　薄っ気味　（～が悪い）

(2) 《　》内の表記は原則として使わないが，参考のため載せたものである。また発音表記が，ひらがなに置き換えられるだけのものは，ひらがな書きを省略した。

例．ガンキョー　がんきょう《ˣ頑強》（ひらがな書きを記したもの）
　　ノー　農，脳，能，《ˣ膿》　（ひらがな書きを省略したもの）
　　ガンコ　《ˣ頑固》　（　〃　）

(3) a　外来語・外国語の場合はその言語名を〔　〕に示したが，英語の場合は省略した。

（16ページ「略号表」参照）

例．〔フ〕……フランス語　〔ド〕……ドイツ語
　　〔中〕……中国語　　〔ロ〕……ロシア語

b　外来語・外国語でその語の一部が省略されたもの，および発音が原語から著しく離れたものは，（　）に入れてその原語を示した。

例．セビロ　背広(civil clothes)
　　デパート　(department store)

c　外来語・外国語をカタカナで書く必要がある場合には「外国語のカナ表記」（昭和36年3月発行）に準拠した。

(4) 漢字の使い方

漢字は原則として「当用漢字表」（昭和21年11月16日内閣告示）にある漢字を，「当用漢字音訓表」（昭和48年6月18日内閣告示）に示された音訓の範囲内で使った。（以下これらを「表内字」「表内音訓」と名づけ，それ以外のものを，「表外字」「表外音訓」と名づける。）《　》内の「ˣ」は表外字，「ᵒ」は「表外音訓」である。

ただし，次のようなものは，表外字，表外音訓を用いる。

a　地名，人名などの固有名詞，およびそれらを含むもの。

例．神奈川，大阪，札幌，越後，近江盆地，武蔵野，柿本人麿，山

姥

b　特殊の分野で慣用として固定しているもの。

例．格天井，嬰ヶ児馬，長唄，歌舞伎，浄瑠璃，記紀津，関脇，枢機卿，黄綬褒章

(5)　漢字の書き換え

表内字，表内音訓で書けないものは，次の方法で書き換えた。

a　「同音の漢字による書きかえ」（昭和31年7月5日国語審議会報告）で書き換えの明示されているもの，またはこれに準ずるもの。

例．月食《ˇ蝕》，総合《ˇ綜》，連合《ˇ聯》，車両《ˇ輌》，保母《ˇ姆》，世論《ˇ輿》，畑《ˇ畠》，糸口《ˇ緒》，足《脚》，思う《ˇ想》

b　書き換えの慣用がないものは全体をひらがなで書いた。

例．じゅうたん《ˇ絨ˇ毯》，あいさつ《ˇ挨ˇ拶》，わいろ《賄ˇ賂》，あっせん《ˇ斡旋》，けいこ《ˇ稽古》，えじき《ˇ餌食》，ながめる《ˇ眺》，とびら《ˇ扉》，けだもの《ˇ獣》

c　次のようなものは，漢字かなの交ぜ書きにした。

①その部分を漢字で書いた方がその語の意味を理解するのに役立つ場合。

②漢字，かなの交ぜ書きの慣用が強い場合。

例．洗たく《ˇ濯》，駐とん《ˇ屯》，だ作《ˇ駄》

d　交ぜ書きの形では誤読される恐れがある場合には，全体をひらがなで書いた。

例．しい《思ˇ惟》，ちょうく《長ˇ躯》，しが《歯ˇ牙》

e　「～然」「～如」の語については，次のように書いた。

イ．「～」が表内字，表内音訓のものは漢字で書いた。

例．敢然，厳然，依然，欠如，突如，躍如

ロ．「～」がかなにすると2字以上で，表外字，表外音訓のものは，「～」だけをひらがなで書いた。

例．りょう然《ˇ瞭》，がく然《ˇ愕》，こう然《ˇ轟》，きっきゅう如《ˇ鞠ˇ躬》

ハ．「～」がかなにすると1字で，表外字，表外音訓のものは，全体をひらがなで書いた。

例．あぜん《ˇ唖》，がぜん《ˇ俄》，きぜん《ˇ毅》，ぶぜん《ˇ撫》

(6)　次のようなものは，原則としてひらがなで書いたが例外も多い。

a　代名詞

これ，それ，どこ，だれ，わたし，いずれ，おのおの…など。

例外．私(わたくし)，僕，君，彼，彼女，お前，自分，皆さん…など。

b　連体詞

この，その，こんな，いろんな，いわゆる，あらゆる，ある，わが，とんだ，いかなる，きたる…など。

例外．大きな，小さな，当の，無二の，去る…など。

c　副詞

やがて，ともに，わりに，まったく，もちろん，むろん，しごく，たぶん…など。

例外．常に，必ず，最も，少し，直ちに，重ねて，絶えず，初めて，夢にも，特に，実に…など。

d　接続詞はすべてひらがなで書いた。

例．しかし，また，すなわち，ただし，および，ならびに，したがって，ところが，おって

e　助詞など。

くらい，だけ，ばかり，ほど，まで，～について，～によって，～において，～にかぎり，～のとおり…など。

例外．～に関して，～に対して，～に際して…など。

f　助動詞，補助動詞などは，すべてひらがなで書いた。

例．ごとく，たい，べき，ようだ，ない，～ている，～ておる，～にすぎない

g　接頭語，接尾語

お～，ご～，おん～，ふ～，ぶ～，～ども，～たち，～ら，～など，～め，～じゅう，～ぶる…など。

例外．不得手，無愛想，世界中，～等(とう)…など。

h　あて字および特殊な読み方をするもの。

やはり《矢張》，めでたい《目出°度》，うるさい《°五°月°蝿》，いとこ《°従°兄°弟》，ふさわしい《°相°応》，きょう，けさ，いつ，あす，おととい…など。

i　擬態語（擬音語で音をまねている感じの薄れたものを含む）

例．きらきら(～光る)，かんかん(火が～おこる)

j　外来語のうちひらがなで書く慣用の強いもの。

例．たばこ，かっぱ，きせる，さらさ

k　宗教関係の固有名詞や専門用語で通俗化しているもの。

例．ぼさつ，だるま，しゃか，いなり，いだてん走り，ぼだい，ついな

(7)　次のようなものはカタカナで書いた。

a　外来語・外国語で原語の明らかでないもの。

例．パッチ

b　擬音語（音をまねている感じの強いもの）

例．カンカン（～鳴る），ドンドン（～たたく）

c　俗語・隠語の類でカタカナで書く慣用の強いもの。

例．インチキ，ピカ一，テキ屋

d　専門用語などでカタカナで書く慣用のあるもの。

例．シテ，ツレ，ワキ，ト書き

e　表外字，表外音訓のためかな書きになる語のうち，カタカナで書く慣用の強いもの。

例．小児マヒ

(8)　漢字の字体

漢字の字体は，「当用漢字字体表」（昭和24年4月28日内閣告示），「人名用漢字別表」（昭和26年5月25日内閣告示），「当用漢字補正案」（昭和29年3月15日国語審議会報告）で示された字体を使った。（以下この字体を「新字体」と名づける。）

a　次の（　）内のような字体は新字体ではないから使わない。

例．回(囘)，協(協)，興(興)，師(師)，職(職)，銭(錢)，第(第)，点(点)，働(働)，幅(幅)，喜(喜)，曜(曜)，臨(臨)，留(留)，歴(歴)，国(國)，権(權)

b　表外字を使う場合も，その字体の全部あるいは一部が新字体で簡略化されているものは，なるべく簡略化されたほうの字体によることを原則とした。

例．木曽節(曾)，讃岐(讃)，逗子(逗子)

(9)　かなづかい

かなづかいは「現代かなづかい」（昭和21年11月16日内閣告示）によ

った。

(10) 送りがな

送りがなは「送り仮名の付け方」(昭和48年6月18日内閣告示)に基づいた「NHK用字用語辞典」(第二版)の方針によった。

(11) 動植物名

a　表内字，表内音訓で書けるものは漢字で書いた。

例. 犬，牛，馬，豚，鯨，松，柳，桃，杉，赤貝，青豆，油菜，大根，大豆

b　送りがなが必要なものは送りがなを付けた。

例. 機織り虫，宵待ち草

c　あて字や誤読の恐れのあるもの，かなで書く慣用の強いものなどはひらがなで書いた。

例. めだか《目高》，ひらめ《平目》，てんとうむし《天道虫》，みつば《三葉》，はげいとう《葉鶏頭》

d　表外字，表外音訓を含むものは，表内字，表内音訓の部分もひらがなで書いた。

例. ろば，やぎ，しろくま，あかとんぼ，みのむし，どくが，ほうれんそう

e　次のようなものは，漢字・かな交じりとした。

イ，一般的な固有名詞などの付いたもの。

例. 朝鮮にんじん，北極ぐま，西洋わさび

ロ，動物学，植物学などの専門用語で漢字で書く語が付いたもの。

例. 二化めい虫

ハ，「～菌(きん)」，「～貝(かい，がい)」，「～虫(ちゅう)」，「～鳥(ちょう)」の形となるもの。

例. こうじ菌，い貝，めい虫，るり鳥

ニ，類を表すもののうち，交ぜ書きの慣用のあるもの。

例. こん虫類，ほ乳類，は虫類，類人えん

ホ，外来語と複合したもの。

例. rye麦，cholera菌，Jacatra芋

ヘ，動植物の属性(色彩，形状，性質，産地等)を示す語と本来の動植物名とが複合したもの。

例. 銀ぎつね，三毛ねこ，野うさぎ，食用がえる，伝書ばと，甘がき，花しょうぶ，寒つばき

ト，本来の動植物名に，さらに普通名詞が複合したもの。

例. うじ虫，しゃちの魚，しいの木，すいみつ桃

(12) 数字の書き方

a　次のようなものは算用数字（アラビア数字）で書いた。

イ，順序，数量などを表すもの。

例. 6・3制，3角形，軽4輪

ロ，特別の読み方が慣用となっているもののうち，数字をきわだたせたほうがよいもの。

例. 1人(ひとり)，2人(ふたり)，1日(ついたち)，2日(ふつか)，20日(はつか)

ハ，固有名詞のうち数字の部分が単に数量・順序などを表すだけで，あまり固有性のないもの。

例. 6大学

b　次のようなものは漢数字（兆，億，万，千，百，十など）を使った。

イ，概数などを表す場合。

例. 二三日

ロ，「つ」のつくもの。

例. 一つ，二つ返事

ハ，特に区別する場合。

例. 三月（みつき），3月（さんがつ）

二間（ふたま），2間（にけん）

ニ，固有名詞のうち慣用の強いもの。

例. 二重橋，四国，九州

ホ，熟語として漢字で書くもの。

例. 万一，腹八分，七五三，十二指腸虫，初七日，お七夜

ヘ，日本の貨幣，紙幣の名称。

例. 一万円札，百円札，百円銀貨，五十円硬貨，十円銅貨，十文銭，千両箱

c　副詞のうち全体をひらがなで書く慣用のあるもの。

例. ひとつ(～やってみよう)，ひところ，ひとしお，ひととき，ひと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c